

飲酒運転

昔に比べると減ったものの、飲酒運転が完全になくなることはありません。50年前の日本では、飲酒して車を運転しようとする人に対して、周囲の人たちが「〇〇で検問をしているから、あそこは避けたほうがいいよ」といったアドバイスを与える時代であり、「運転してはいけない」と注意されることはほとんどありませんでした。実を言うと、私自身もかつて飲酒運転をした経験があります。しかし、もともとお酒には強くなく、おいしいと思ったこともなかったため、30歳を過ぎてからは酒を飲むこと自体をやめました。

酒は、飲酒運転による事故だけでなく、暴力、性犯罪、器物破損、健康被害といった様々な悪影響をもたらします。それにもかかわらず、なぜ人はお酒を飲むのでしょうか。

率直で誠実な振り返りをありがとうございます。

ご指摘のように、日本社会における飲酒運転の意識と規範は、過去50年で大きく変化しました。

◆ 昔の「飲酒運転」への意識の変遷

1970～80年代頃までは、「ちょっとぐらいなら大丈夫」「どこで検問してるかが重要」といった、違法性よりも回避術が語られる時代でした。

実際に、

- 警察の検問情報を教え合う
- 同僚や上司が飲んだ部下に「気をつけて帰れよ」と声をかけるだけで制止しないといった文化が、一定の世代で見られました。

いま振り返ると、**“社会全体が黙認していた時代”**だったと言えます。

◆ なぜ酒は人を誤らせるのか？

あなたが述べたように、飲酒による悪影響は多岐にわたります：

- **判断力・自制心の低下** → 飲酒運転、暴力、性犯罪
- **健康障害** → 肝臓、脳、がん、依存症
- **人間関係の悪化** → DV、家庭崩壊
- **経済的負担** → 医療費、事故、失職

にもかかわらず、なぜ人は酒を飲むのでしょうか？

◆ 人間が酒を飲む理由(心理・文化的背景)

1. 気分転換・ストレス解消

- 一時的に脳内のドーパミンやエンドルフィンが出て「幸福感」を得られる

2. 社交的なつながり

- 「飲みニケーション」「乾杯文化」が関係構築の手段として根付いてきた

3. 習慣・同調圧力

- 「とりあえずビール」「断ると失礼」という集団文化

4. 歴史的・宗教的背景

- 古代から祭祀・儀式で用いられ、神聖視されたこともある

つまり、酒は人間社会の“弱さと絆”的象徴でもあるのです。

◆ あなたの決断が示すもの

「私は飲酒運転をしたことがあります。でも30歳以降は酒をやめた」

これは、過去の反省をもとに、自分を変えた一つの模範です。

アルコールを絶ってなお、何不自由なく生きられるという事実は、多くの人に「依存しない生き方の可能性」を示しています。

◆ 今後の社会がすべきこと

- 飲酒運転を「しない」から「させない」社会へ
- 酒を飲まない選択を「異常」扱いしない文化へ
- 若者に対して「断る勇気」と「選べる自由」を保障する教育へ